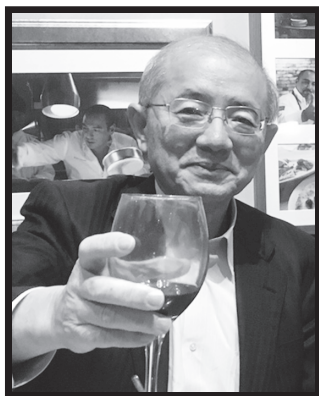


偉大なる臨床医，墜つー原田孝司先生を悼む



原田孝司先生

原田先生が2023年1月10日に亡くなられた。享年78歳であった。

長崎と北海道の医師がどうして知り合ったのかと不思議がる方も少なくないと思われる。

まずは成り行きから話したい。伊丹が初めて「臨牀透析」の編集会議に出席したときに伊丹の隣に座っていたのが原田先生であった。以来編集会議での伊丹の左隣席は原田先生となった。編集会議後に翌朝長崎に帰られる原田先生と北海道に帰る故大平整爾先生とともに一緒に過ごさせていただき、常宿の某ホテルのロビーラウンジで雑談しながらビールを飲むというのが定例であった。

聴くと、原田先生は英国の有名なCameron教授のいたGuy's Hospitalへ留学され長崎大学の助教授を勤められ、桜町病院（現長崎腎病院）に勤務しているとのことであった。

そして桜町病院では自らダブルルーメンを挿入され、PTAを施行し、外来診療を行い、入院患者の主治医となって診ているとのことだった。実際、東京に来ていても病院からの電話で指示を出していたのを目撃している。自分は驚いた。アカデミアに長くいた人である。学問・

研究をおもに行い、治療方針の指示は出すが臨床の現場は若手の医師に任せていておかしくない人であるはずだ。それが第一線の臨床医として楽しそうに生き生きと働いているなんて信じ難かった。先生の興味は腎臓・透析を含めた腎代替療法・アフェレシス・腎移植と幅広かった。内科医としては珍しく、腎移植にも関係され臓器移植対策推進功労者として令和3年に感謝状を授与されている。さまざまな研究会でお見かけした。いつも会場の前の席に座られて熱心にメモされ聞かれていた。原田先生は博識であり最新情報にも詳しくあった。いつ勉強しているんだろうと思ったことだった。

「そう～しおるんですよ」というフレーズが口癖で、独断ではなく押し付けでもない形でやさしく話されることが多かった。これであれば若い医師は自由に発言でき、のびのびと活躍できるなと思ったことだった。事実、長崎大学から素晴らしい後輩たちがたくさん育っている。

原田先生は長崎愛の強い方であったと思う。編集会議で適切な執筆者が見つからないときに、長崎のXX先生が居ります、と原田先生は発言して、良い執筆者を掘り出していたのを思い出す。

忙しい臨床のなか時間を見つけ論文を読むのは難しく、臨床と学問の高いレベルでの両立はさらに難しい。原田先生は見事にそれを成し遂げられた先生だと私は思う。

もともと先生の医師としての素晴らしい生き様をわれわれに見せていただいたかった。

どうかこれからの自分たちや今後の医療を見守ってください。

原田先生 ご冥福をお祈りいたします

合掌

伊丹 儀友（伊丹腎クリニック）